

平成二十三年十二月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八六三号

火星

平成二十三年十二月号



七曜抄

(七)

山尾玉藻

いま汲みし水に塵うく十三夜

末枯や白湯飲んで耳うとくゐる

楽団の荷のいろいろに黄落す

揺るるべく窪地に揺れて吾亦紅

空を見てまた掃きはじむ銀杏かな
モノレールの影きて止まる枯野かな
神留守のお百度石の向き合へる
すぐそこに占ひ師座し水涸るる
大年の水掃きぬたる消防署
年の梅繁昌亭の灯にうかび

太白星

柳生千枝子

珊瑚樹の葉のつやつやと九月かな
秋扇帯に挟みしままひと日
秋夕日我が影法師見つつ行く
いつの間の田水失せたる下校道
色鳥の番ひ来てをり庭の隅
秋彼岸我に遺れる母の癖
ひつそりと白く咲き出て彼岸花

杉浦典子

観音と邪鬼並びる夜長かな
台風の逸れし作務衣の紫紺いろ

夕かなかな蔵の二階の窓開いて
台風の過ぎし若草山の容
林檎園の空に梯子のとどきけり
夫に肩叩いてもらふ虫の夜
コスモスの咲き母の忌の切符買ふ

浜口高子

色なき風素通る口に苦うるか
子規の小さき文机おもふいなつるび
船酔の少しく月の砂を踏む
燕去んで蘆のそよぎの濡れぬたり
月に触れグラスの氷崩れたり
比叡の鐘一打に夜の蚊の名残
何処からが花蕎麦どつと倒れぬる

火星作品

山尾玉藻選

母病むと朝顔たんと開きけり
大佛の膝の上にある残暑かな
瓢箪のゆきつきし容月上る
閻魔堂の中秋晴でありにけり
閻魔堂に男と女鳥渡る
卵生む翅つかひをり秋の蝶
三つに見え一つでありぬ毒茸
あかんべえして秋風の沁みたるよ
単線の鉄橋高し崩れ梁
鯛売リヤカーの水こぼしけり
本殿の燭落しゆくかなかな
ぶらさがるだうらくぶりや黄南瓜
芋嵐一枚岩の橋現るる

大和郡山城 孝子
八幡大山文子

坂口夫佐子

柝の音に膝くづしたる月の客
朝露の畦に炎の立ちあがり
裾たくし行く山の辺の草の花
つやつやの糞飛火野の野分晴
一力の門の屋根替へ鳥渡る
萩叢の括られ影の生まれけり
高円山の月中天に落し水
牡の鹿のおのきて群おののきぬ
活けられて曼珠沙華の赤らしからず
萩咲ける石段に足もつれけり
青北風やわが名の護摩木加へけり
萩叢のこんなところには仏足石
豊年や戸口へつゞく月の径
やや傾ぐ柱にやまぬ虫しぐれ
白萩や古き佛は山を負ひ
爽涼や夢殿めぐる乳母車
白萩や勤行僧の足はやし

宝塚山本耀子

河崎尚子

吹田田中文治

選のあとに

山尾 玉藻

閻魔堂の中秋晴でありにけり

城 孝子

前に立つ者を一瞬たじろがせるほど、閻魔像の忿怒の形相はもの凄い。ところが掲句、閻魔堂の中に爽やかな秋日が差し込み、その明るさの中で閻魔像のお顔も少々迫力に欠けるように感じた様子である。上五に覚える陰翳のイメージが中七、下五の思いがけぬ展開で見事に裏切られ、このギャップが快い衝撃となっている。同時発表作へ閻魔堂に男と女鳥渡るゝでは、人間の哀しさや疎ましさを象徴する「閻魔」も「男と女」も、「鳥渡る」の大自然の営みに比べるとなんとちっぽけなことか。「鳥渡る」は見事な終止符。

三つに見え一つでありぬ毒茸

大山文子

遠くから三本に見えた茸が実は一本であったのか、三本であった筈の茸を後ろから眺めると一本にしか見えなかったのか、何れにしる人をたぶらかす異様な形の茸に違いなかるう。これはもう紛れもなく「毒茸」と断定する作者。ユーモアを湛えつつ、毒茸らしい不気味さをおさえている。同時作品「あかんべえ」して秋風の沁みたるよ、このあかんべいはこのころの内の行為と捉えたら良いだろう。あかんべえは稚拙で卑俗な行為であり、その後のうそ寒さは一入であったに違いない。

「あかんべえ」と「秋風」の感覚的ギャップが作者の寂寥の思いを伝える。内緒ながら、私などは主人の背中に向って思い切りあかんべえをすること度々、である。

本殿の燭落しゆくかなかな 坂口夫佐子

いくつかの社殿がある広く奥深いお社の景を思い浮かべた。本殿の蠟燭の火が一つ一つ消されてゆくほどに、社殿が薄暗くなり夕べの気配が濃くなってゆく。本殿が夕陰りを深める中、蝸の透けるような声が杜の奥深さや暗さを想像させ、透明感ある作品。

裾たくし行く山の辺の草の花

山本 耀子

露で濡れないようにか、それとも草虱がつかぬようにか、ズボンの裾を少したくし上げているのだろう。普段は余りしない格好を少し楽しみながら歩む作者であろう。靴が触れた「草の花」が可憐に揺れ、作者の歩みに草の香が瑞々しく匂い立つようだ。

活けられて曼珠沙華の赤らしからず

河崎 尚子

作者は活けられてある曼珠沙華を見て、その赤さが本来のものではないことに気づいた。曼珠沙華は野辺や畑の畦に咲いてこそあの怪しげな紅いろが際立ち、摘み取られた曼珠沙華はもはや真の曼珠沙華ではない。そこに発見がある。

恒星圈

廣畑忠明

橋立を逆さにしたる秋澄めり
製材の音いつまでも秋の雲
雲流る影の池打つ鬼やんま
この家も唐辛子干す能勢も奥
秋晴れて影連れ歩く曳売り女

深澤 鱧

堀 志 皋

雁のこゑうからの息に顔寄せし
野分だつ巷にひとの生き死にし
色鳥や兄の柩に小窓あり
蓮の実の飛ぶには青き花托かな
おのころの島山やさし後の雛

蟪蛄の斧を上げたるスパナかな
台風の通過中なる車検場
曼珠沙華千畳敷といふ河原
馬手に杖弓手に酸橘一袋
稲が香や父の遺品のハンチング

藤原冬人

松井倫子

月の風稲きんいろの音を立てて
ことごとく秋の行くらし立石寺
秋潮のこの一羽なる鴉かな
登校の空晴れ渡り鶴来る
大地震を言へば銀漢海に澄み

鳥渡る段々畑のゆみなりに
ふくよかな膝に猫くる良夜かな
濃き淡き鶏冠の紅や野分晴
枕五つ竿につるさる黍嵐
奈良町は坂より古ぶ露の玉

獅子座

山尾玉藻推薦

藤田素子

退院の父の踏みたる木の実かな
いろいろの尻尾の過る草の花
招待状の金箔に秋深まりぬ
連れぬたる犬秋風につまづけり

川端俊雄

日の当たる山を見てゐる秋の蛇
箒目の厨へ続く萩の雨
上品の膝に通へる萩の風
地に還るもろもろ秋日濃かりけり

涼野海音

猫じやらしばかりを活けて子規忌かな
ビニールの袖の吹かるる案山子かな
ライオンの檻に骨あり秋の風
西日差す壁に橋本夢道の句

奥田順子

採血に針の用意や昼の虫
椅子足して米団治待つ初紅葉
宵闇やためし打ちさる大太鼓
鳥渡る絵手紙いつも桜島

天谷翔子

秋草を摘みつつ百済思はるる
コスモスに埋もれてをりぬ車椅子
水に映え遠ざかりゆく秋日傘
歩き出しさうな形の茸なり

井上淳子

白おしろい咲いて弁天さまの島
鯛の声に濡れぬし船廊下
半乾きの傘持ち歩く草は実に
自然薯を掘りきし夜の父の背

緒方佳子

夫と吾のタオルに秋の晴れにけり
栗のいが拾うて今朝の一万歩
初鴨を待つて居るやう通し鴨
焼酎の甕積み上げし昼の虫